

京都府のCBT化による学力測定への挑戦

— 集団ではなく個々の児童生徒の学力向上に向けて —

平山孝次先生 (京都府教育庁 総括指導主事)

溝上 慎一 Shinichi Mizokami, Ph.D.

学校法人桐蔭学園 理事長
桐蔭横浜大学 教授

<http://smizok.net/>
E-mail mizokami@toin.ac.jp

学校法人河合塾 教育研究開発本部 研究顧問

【プロフィール】 1970年生まれ。大阪府立茨木高校卒業。神戸大学教育学部卒業、1996年京都大学助手、講師、准教授、2014年教授を経て2018年に桐蔭学園へ。桐蔭横浜大学学長（2020-2021年）。京都大学博士（教育学）。

*詳しくはスライド最後をご覧ください

※本動画チャンネルは溝上が個人的に作成・提供するものです。
公益財団法人電通育英会の助成を受けて行われています

(ご紹介)



平山孝次
ひらやま こうじ

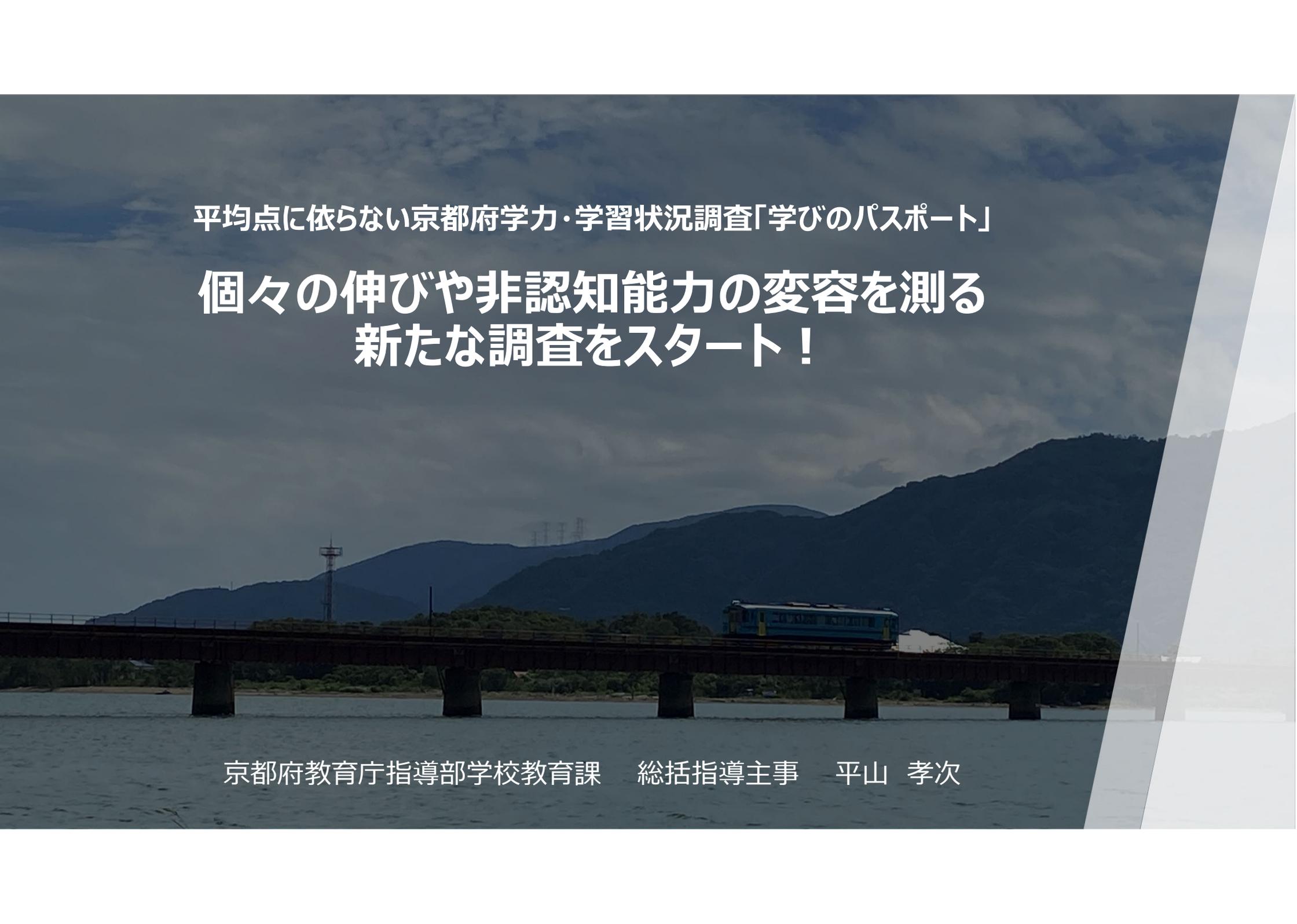
京都府教育庁指導部学校教育課 総括指導主事



京都府内小学校教諭、長岡京市教育委員会、京都府総合教育センター、長岡京市立長岡第四小学校教頭を経て、現在に至る。京都府総合教育センター時代から、京都府独自の学力調査事業（当時は「京都府学力診断テスト」という名称で）に携わってきた。



それではご覧ください



平均点に依らない京都府学力・学習状況調査「学びのパスポート」

個々の伸びや非認知能力の変容を測る
新たな調査をスタート！

京都府教育庁指導部学校教育課 総括指導主事 平山 孝次

■ 児童生徒が社会に出た後も学び続けていくために…

第2期京都府教育振興プラン



【児童生徒】
自己理解のパスポートに

【教員】
経験、勘、観察にエビデンスを加えて
授業改善、学校改革のパスポートに

児童生徒一人一人の学びの変容を把握することにより、
学校における個別最適な学びと協働的な学びを充実させ、
一人一人の可能性を最大限に引き出す教育の展開を

「目指す人間像」へ成長を促すために、
“個々の伸び”に着目した新たな調査を導入

■ 経年比較ができる方法はないのか？

	点数	平均
小4	60	55
中1	65	70

点数が上がったから、学力も伸びている？

平均点より下になったから、学力は下がった？

これまで改善してきたことや研究で実践してきたことが、子どもたちの学力を伸ばすことにつながっているのか？

IRT（Item Response Theory）とパネルデータによる 学力分析の手法を取り入れた学力調査

- ◆ Item：試験を構成する1つ1つの問題
- ◆ Response：正答するか誤答するかの状況
- ◆ パネルデータ：同じ児童生徒を継続的に複数の項目にわたって記録したデータ

■ 児童生徒一人一人の伸びや変容に着目する調査に…

一人一人の伸びや変容を引き出し、誰一人取り残すことのない教育の展開へ

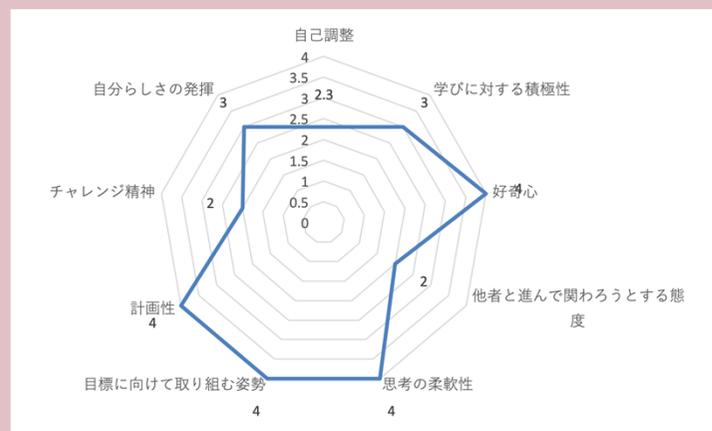
児童生徒用個人結果票例

認知能力の伸び

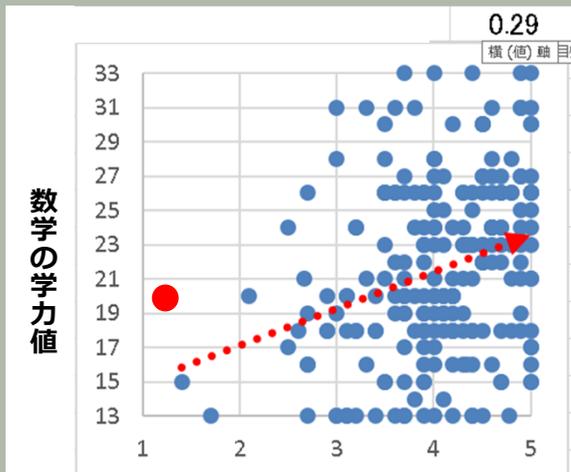
		小学校			中学校		
		第4学年	第5学年	第6学年	第1学年	第2学年	第3学年
高 ↑ ↓ 低	ステップ12						
	ステップ11						
	ステップ10						10-A
	ステップ9					10-C	
	ステップ8			9-B	9-B		
	ステップ7		7-B				
	ステップ6	6-A	7-B				
	ステップ5						
	ステップ4						
	ステップ3						
	ステップ2						
	ステップ1						

*各ステップはA～Cの3段階に分割。12×3=36段階で表示

非認知能力の変容



学校用結果帳票例



「主体的・対話的で深い学び」の回答状況

■ 2年間の実証研究を経て、令和5年度から全府実施に…

1 対象学年 小学校第4学年から中学校第3学年

2 実施教科等

- ア 教科に関する調査
 - ・小学校第4学年から中学校第1学年：国語、算数・数学
 - ・中学校第2・3学年：国語、数学、英語
- イ 質問調査
 - ・児童生徒質問調査
 - ※生活状況、非認知能力、学習への取り組み方等に関する調査とICT利活用に関連する調査

■ IRT×CBT方式に…

- 1 項目反応理論を用いた、教科に関する調査【IRT（Item Response Theory）】**
難易度が振られた問題を出題し、どの程度の難易度の問題を解けたかを測定
- 2 非認知能力や学習への取り組み方の変容を測る質問調査**
京都府教育振興プランに示す3つのはぐくみたい力、学習への取り組み方等について、複数の質問項目を組み合わせて測定
- 3 1人1台端末で調査【CBT（Computer Based Testing）】**
1人1台端末で出題及び解（回）答

■ 質問調査の全体構成は…

生活状況調査
30問程度



非認知能力に
関連する調査
35問程度



学習方法等調査
小：25問 中：30問程度



ICT利活用調査
5問程度



質問調査
小4～中1：92問
中2～中3：98問

「経験の確認」「有効性の確認」に関
わる項目を中心に調査

「学習の方法」「主体的・対話的で深い学び」について、児童生徒の
学習のようす及び授業等での経験を中心に調査

第2期教育振興プランで示された京都府としては
ぐくみたい力を細分化して調査

これまでの京都府学力診断テストや全国学力・学習状況調査での質問項目から
第2期教育振興プランの目標指標にもなっている項目を中心に調査

非認知能力に
関連する調査
35問程度

- 3つの力や「包み込まれているという感覚」はそれぞれに独立したものではなく、重なる部分も
- 下位概念も独立したものではなく、重なる部分もあると考えられることから、「○○力」といった言葉を使用していない

上位概念

主体的に学び考える力

多様な人とつながる力

新たな価値を生み出す力

包み込まれているという感覚

下位概念

自己調整

学びに対する積極性

好奇心

他者と進んで関わろうとする態度

思考の柔軟性

目標に向けて取り組む姿勢

計画性

チャレンジ精神

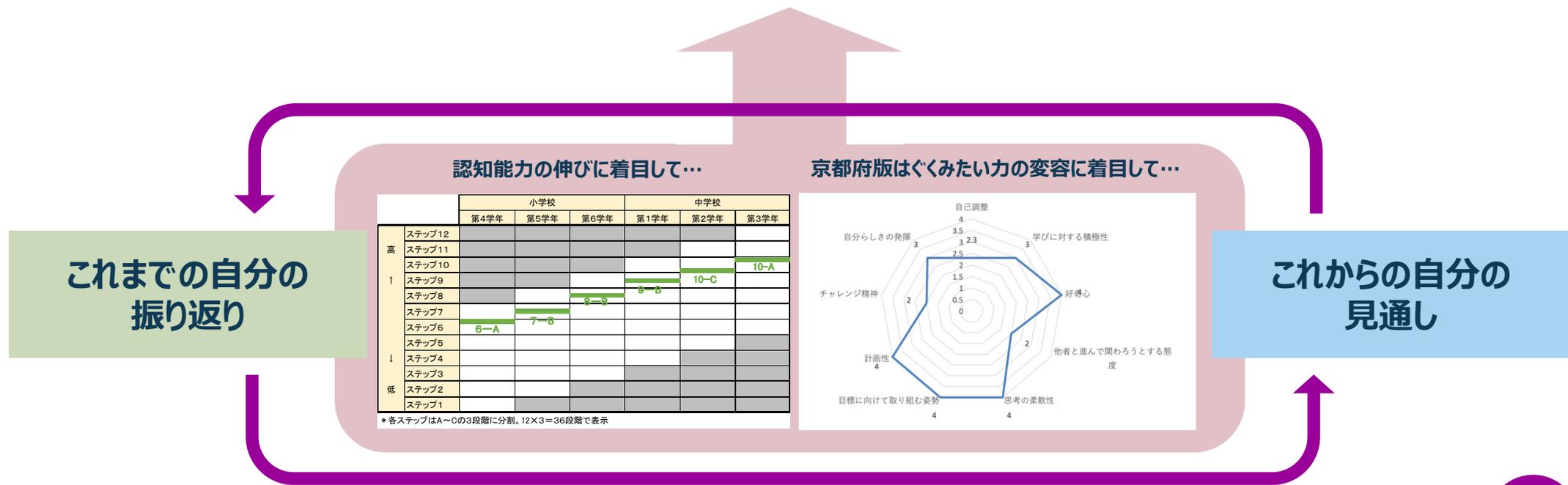
自分らしさの発揮

心理的安全性

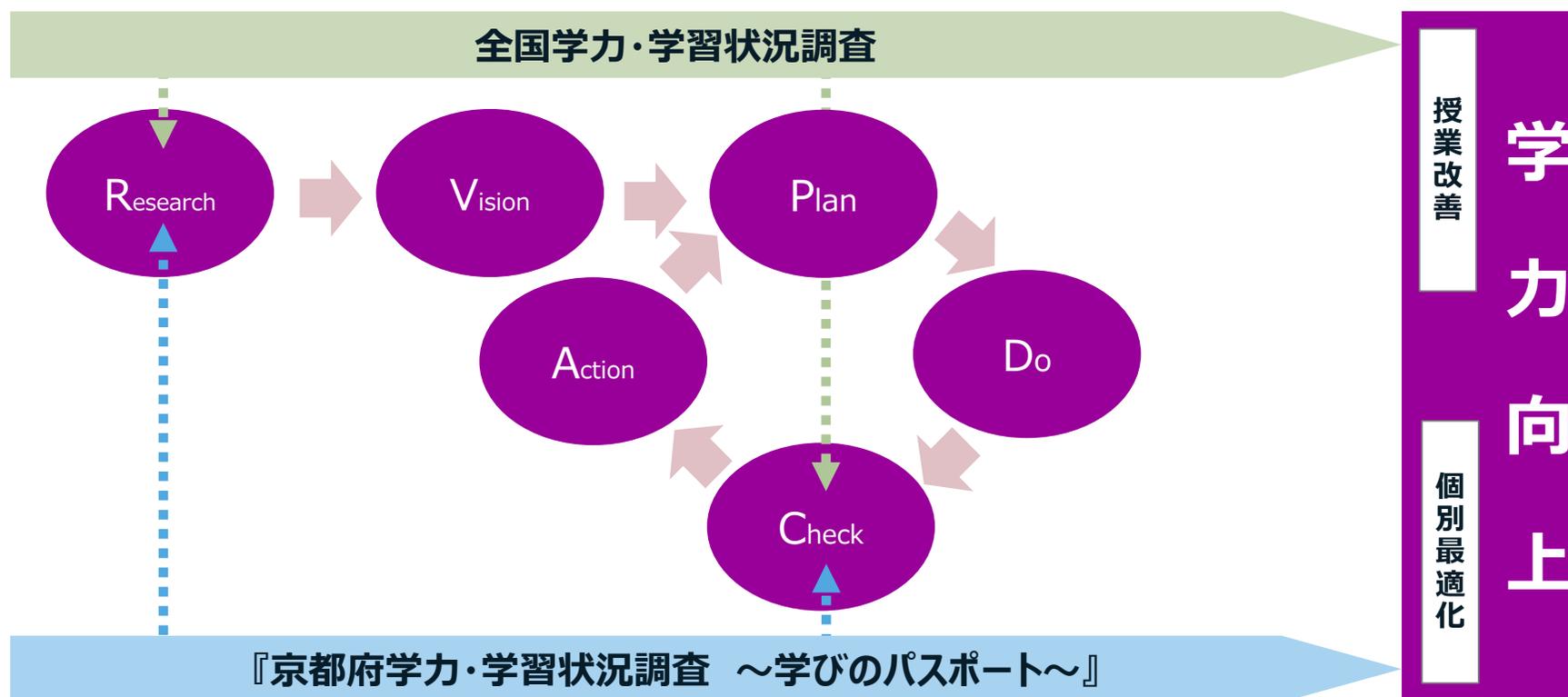
学びのパスポートの活用～児童生徒～

■ キャリア・パスポートと同様の活用を！

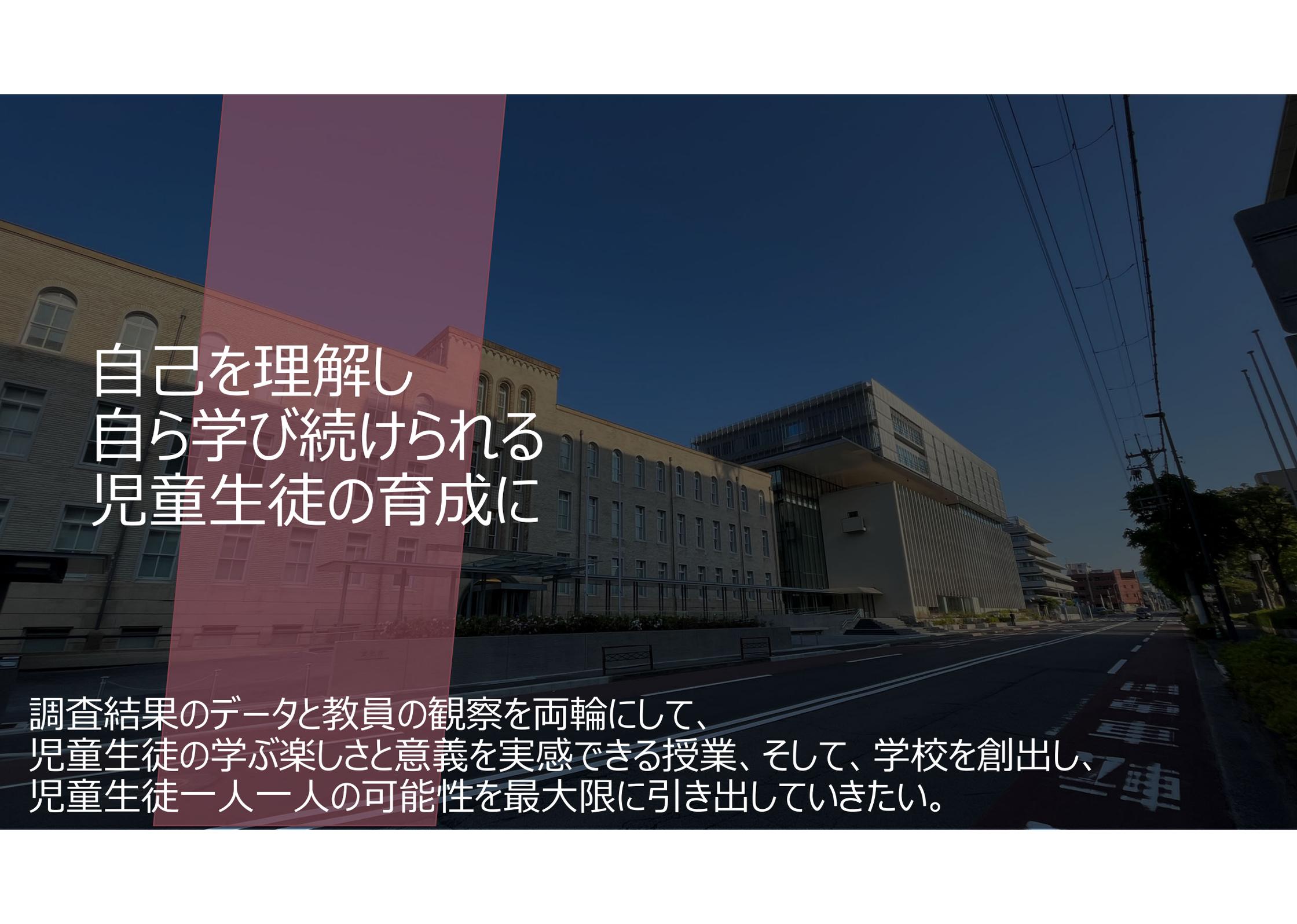
これまでの自分の学びの足あと、成長の足あとから、
 自己の学び方を理解し、これからの自分の目標をもつものに



■ 授業改善、学校改革の効果検証と新たな課題把握のツールに…



2つの調査の特徴を踏まえて、**多角的な分析**による効果的な活用を！



自己を理解し 自ら学び続けられる 児童生徒の育成に

調査結果のデータと教員の観察を両輪にして、
児童生徒の学ぶ楽しさと意義を実感できる授業、そして、学校を創出し、
児童生徒一人一人の可能性を最大限に引き出していきたい。